

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4270102132		
法人名	有限会社長建寄り逢い長崎		
事業所名	グループホーム 坂の上の紫陽花		
所在地	長崎市本河内2丁目14-15		
自己評価作成日	平成24年2月22日	評価結果市町村受理日	平成24年5月11日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉総合評価機構		
所在地	長崎県長崎市桜町5-7 大同生命長崎ビル8階		
訪問調査日	平成24年3月17日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

長崎で民間法人としては最初のGH開設して今年で12年経過しました。昨年より初心に戻る事を目標として来ました。その目標はスタッフが入居者と触れ合いをしているのか？を再度胸に手を当てて考え、総括施設長と管理者、スタッフが反省をし、開設当時に行っていた「入居者の交流触れ合いの場を設ける事でした。毎日16時より30分程度レクレーション等を行い、また週の2日は入居者とスタッフ共同で、手作りパン・ケーキと手作り餃子を作る事にしました。食事時間も手作り談義に花が咲き過ぎされています。また当ホームは年2回と決められている訓練を火災訓練においては「月2回、夜間と日中」に行いました。を実行し、一年が過ぎました。しかし、これで満点なのか？と、思い続けています。当ホームは入居以来だんだん元気があった方も高齢化と共に、ホームから外出するのを、嫌がる年代、引きこもる年代になって来ました。入浴も嫌がる方が多くなりました。しかしそれは介護する者が入居者の言葉だけで入浴を嫌がっていると自己判断している事もある様に思いました。そこで今年は何年前から足湯を取り入れて、入浴しない方へは毎日足湯をすることにしました。

ホームは小高い傾斜地に位置している。ホームは総括施設長の自宅を改築し開設されており、周辺地域と馴染んでいる。総括施設長及び管理者は地域高齢者へも支援の目を向け積極的に地域貢献を行っている。職員は利用者への介助支援を重点をおきながら、家庭的な雰囲気作りを心がけている。利用者との会話の時間を大切にし、親身に対応を行っている。高齢化、重度化が進んでも利用者が安心できるような環境づくりを行っている。長崎在宅Drネットとの連携で、日ごろからの健康管理が整っており、看取りまで視野に入れた支援体制が取られている。人命を預かる施設として、火災・災害に対する意識が強く、職員もその意義を周知している。今後のグループホームに求められる介護支援及び看取りを全力で熱心に取り組んでいるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) ○
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) ○	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) ○	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) ○	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12) ○
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) ○	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31) ○	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28) ○		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	尊厳についての言葉使いにおいて、常に「ーさん」という事がその方への尊厳であると、開設者として常日頃よりスタッフやその他の方に伝えていましたが、開設して12年経過した時点で「押し付けで自己満足の教えてではないか?」と思いました。少し間違っていたを感じています。入居者には小さい時、一緒に暮らした人達、昔から呼ばれている「名称」があります。知的に障害がある場合は「わかり易い名前」を「ーちゃん」と呼ぶ時があります」それで「親しみ」と「信頼が出来る」事があるのを江口房子施設長から聞き、知りました。人によっては「お母さん」や「お父さん」と呼ばれる事で、家庭の中での暮らしを再現する事、親しみを得る事がある為に、その方々の希望する呼び方も考えるべきと知りました。理念の再確認が必要と思います。開設12年に入りましたので、理念の内容も現在の書き入れ内容を書き直す時期に来ている。	利用者に「尊厳」を持って接する事に努め、日々管理者、職員で確認しながら実践している。理念はホーム内に掲示し、利用者との会話や接し方など利用者の歴史をふまえ注意を払っている。設立当初からの理念は12年目を迎え、看取りの事例が増え、前向きに取り組む事業所として、介護のあり方を問うている状況であり、理念を再考しているところである。	これからの坂の上の紫陽花を、代表を中心に職員と共に検討し、看取りまです視野に事業所らしい理念の見直しがされる事で、更なる実践への活躍を期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	ホームが総括施設長江口孝則の元自宅であり、親の時代からの地域貢献の歴史があり、確実に地域の活動への参加や地元の人々との交流に努めている。「自治会役員」や「民生委員」の役職も持つ事で、地域の一員として交流している。今後も介護業務で地域へ出来ることに取り組んでいる。ホームは12年からの開設以来の歴史があり、事業所と地域とのつきあいは、当ホームとして地域の中で理解をされてお互いに理解しながら、入居者のその人らしく暮らしていくことが出来るよう、日頃日常的に交流している。23年10月のお宮日の、神輿守りの袴組への参加など、地元とのつながりをおこなっている	総括施設長は地域に育ち自治会役員である。管理者は民生委員であり、地域高齢者への炊き出しなど参加している。職員は地域の祭りの手伝いをし、利用者は見物に出かけている。近所の人からは、干し柿の差し入れや使わなくなったシャワーチェア、タオル等の寄贈も受け交流がある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域のホームとして、当施設長は本河内地区の老人を把握する事もあり、町内会長の要請で「民生委員」の職に就く。江口総括施設長は町内で、自治会役員に就き、地域貢献をおこなう。いろいろな地元での行事参加により、また認知症のみでなく、高齢者への対応や身体障害者の対応についても相談が、頻りに持ち込まれる。今後も地域の方々が気軽に立ち寄れる雰囲気作りに関心している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に一回の定期的な地域運営推進会議を確実に実施し、町内会役員、民生委員、老人会会長、利用者、家族、法人代表者及び管理者スタッフで構成し、報告など詳しく写真を使い説明している。参加者委員の意見をサービス向上に活かしている。	今年度は6回、規定のメンバーで開催されている。入居者の状況報告や看取りの現状等も報告、行事報告や研修報告をしている。介護計画の説明も検討中である。会議の中で火災訓練への自治会参加など意見は実現に向け検討し実施している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	2ヶ月に一回の定期的な運営推進会議に市担当者及び包括支援センター職員の方が参加されたり、何かあれば頻りに連携を充分にとりサービスの質の向上に努めている。また江口房子管理者兼施設長が民生委員の為に、いろいろな機会での会合などで、長崎市の包括支援職員や長崎市すこやか支援の職員とも、積極的に協力体制を築いている。	毎年介護相談員の受入れを行っている。困難事例や様々な手続き等で行政との連携を取っている。行政からの介護保険等の研修の案内を受け受講している。また、利用者の認定申請手続き時や利用者の状況を知らせる際など担当職員へ連絡を取り、相互に情報交換を行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	開設以来、身体拘束の基準的な考え以前に家庭は鍵をしないと云う考えで当ホームは玄関などの施錠は禁止し、自由に気軽に立ち寄れることが出来るよう努めている。玄関に施錠をしている事があれば、その度に注意している。「施錠しないホーム」を我々は理念としている事を、スタッフに厳しく伝えている。	代表が長崎県身体拘束廃止推進員養成研修を受講している。受講後は職員へ研修報告と勉強会を開催し、職員も言葉による拘束を含め周知徹底している。ホームでは施錠せず見守り支援を行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	24年1月26日に、関連の講習会に参加し、基本的考えを再度学ぶ。いかなる虐待を見逃さないよう、スタッフなどにも徹底した虐待防止の管理している。入浴介助の際にも身体に虐待形跡が無いかのチェックを常に行なっている。高齢者への虐待など「絶対」に見逃ごしはしないという姿勢がホームの精神である。理念として「絶対にこのホームは、虐待は許さない。見逃ごさない。見ぬふりをしない。」		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持つべきだが、制度の理解まではまだ時間がかかっている。管理者は入居者が日常生活自立支援事業や成年後見制度について利用している為に理解しているので、ホームの職員にも学ぶ機会を持たせたいと思っている。利用者に必要な状態がきたら関係者と話し合いをしている。当然、それらを活用できるよう支援している。今日もまだ満足はいく事は、無い為。反省課題である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用料の改定時などは、事前に手紙などを郵送し家族等に説明している。不安や疑問点があれば、いつでも十分な説明を時間を掛けて行なう事も、家族等に説明している		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営に関する利用者、家族等意見が、一年間は無かったが、もし意見が出た時点では、毎日のミーティングでも報告を全スタッフの前で実行する事になっている。今後も利用者の状態変化時の連絡や健康面での相談を話し合い家族の意見なども運営に反映している。常日頃において、管理者や施設長が家族の訪問時など日常の様子の報告を、日常的に行っている。必要以上に心配かけてはいけない事もあり、家族へは、日常の事を参考にし、家族に精神的負担を掛けない言葉で、分かり易く説明する事を心掛けている。	家族の訪問時は、管理者等が利用者の状況を報告し意見を聞いている。管理者が不在時はスタッフが対応している。出た意見はミーティング等でスタッフへ伝えている。来所される家族とは互いに思いを伝え共有している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	以前は意見もたくさんあったが、この一年は職員の提案や意見が少なくなって来ているが、勤務後にスタッフとの懇談会等を設けていろんな意見を和気あいあいの中で聞くことになって、提案があれば取り入れる事になっている。また代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	毎朝、隣接する系列のグループホームと合同で意見交換をしている。午後ミーティングを行い、その日の連絡事項を全員で把握している。必要な場合は、夜にミーティングを開き検討している。入浴の曜日を決めずに行う事等、職員の意見や提案は取り入れている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者として、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努める事によって、ホームのレベルアップに努める様に努力をする事としている。介護報酬が低いためにも低賃金であるが、いろんな努力で、給料を見直し、全員の昇給を行った。また、夏の激暑手当なども7月8月9月にはも特別手当として支給し、スタッフへの感謝の証しを示している		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ホーム内でケアにおける、その者の能力と力量に応じた実務での優しい言葉での指導が必要と改めました。諦める事なく、資料文書を参考にしてと口頭での伝達指導が重要である事を実践する社内指導研修を企画しています。また、その他の研修など積極的に参加を促す事も、スタッフを育てる意味でも必要とする為に、機会を設けて参加させる事を心掛けています。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	代表者として管理者や職員が同業者と交流する機会を作りが不足していると感じている。ただし開設当時よりホームの見学はいつでも受け入れる体制であり、入口の扉は開けているつもりである。開設当時はその他との交流もあったが、近年は講習会等の機会と同業者と情報交換をしているのが現状である。現在は医療機関などと情報交換しケアサービスの質の向上に取り組んでいる。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	管理者やスタッフが、日頃の介護等で信頼を得て、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。利用者の話をゆっくり聴き、そばに付き添い入居者との信頼関係が築くよう努力している。当ホームの入居者は、自分の意志をはっきりと示す為に、ホーム内の飾り付けや入居者同士への、気が付かない事をスタッフにも助言する事などもある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	代表者の考え方としての指導は、サービスを導入する段階で、最初に「家族がどんなことで困っているのか？」を聞く事において、まだ不満足を感じる様に思っている。今後も出来る限り初心に戻り、謙虚な思いを持つことを、管理者と協議している。また「利用料など金銭面など」に関しても、出来る限り要望に答えるよう支援している。当ホームは、家族の居ない、無縁の方が入居されているが、家族と同じ思いで、また人としての最期を安心して迎えられる事への、事業所として出来る限りの努力を行っている		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	何が一番必要としているのか見極め、安心して生活を送れるように、介護していて観察し「出来る事。出来ない事」を見定め、支援している。が、他のサービス利用も含めた対応に努める事も、必要であるが現在無いのが現状である		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ホームの「理念」にあげている通りであり、利用者の尊厳を尊重しながら支えあう、信頼できる家族同様の関係を築いている。介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係、それがグループホーム本質である。だが、それも我々の自己満足かも知れないと、自問自答しながら、うぬぼれる事なく。を今後の我々の課題と思っている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	代表者の考え方は、家族の関係を常に基本として、職員にも本人と家族の絆を大切にしながら支えるという考えは築いている。また家族がいても見放されて居る者、無縁の者など、家族の支援はいろんな例が有るが、共に支えて行き事については、代理家族の思い、家庭という立場で、事業所として出来る限りの努力を行っているが「押し付けで無い」考えで今後も努力する。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。事へ、扉を閉じる事なく、支援して行く事を、当然努力している。	知人や家族の訪問が多くある。馴染みの理髪店に通ったり、月に1回母親の命日に自宅へ帰宅している利用者への支援等継続している。外出時は職員が同行している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ホーム内で、日中車椅子に座って居る入居者同士が、手を握っている姿、握られている方も安心して笑顔を見て、胸を打たれる事もある。またホーム内で知り合った人同士でも、昔からの親友である様ないたわり方を見ると「一人一人が孤独を味う事が無い」ホームが理想であり、スタッフの入居者への思いやりが、入居者にも伝わっている様な気がしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後は、当ホームとは関係なく、途切れる事が今までの事実であり。現実には行っていない。		
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの思いや意向を把握し、外出や趣味への支援などを本人本位に検討する様に努めているが、理想と現実には難しい事が多い。室内への持ち込み家具等で希望を把握している事もある。	日常的な会話の中で行ってみたい場所や希望を伺ったり、一人ひとりの思いや意向を把握し実現できる様に努めている。言葉に出せない人には、表情等を見ながら問いかけ、反応を見ながら利用者本位に検討し対応している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	介護計画書で、分かる範囲で入居者の一人一人のバックグラウンドを調べる事で、これまでの経過を把握する事になっている。また日頃の会話で経過バックグラウンドを知りその人らしく暮らせるよう出来る限り努力して支援しているつもりである。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの一日の過ごし方の把握は、個人日誌などで行っている。毎日の様子を元に心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方についてスタッフなどの意見を取り入れている。本人、家族、必要な関係者と話し合いについては、家族の意向は聞く事になっている。	短期長期で介護計画が作成している。日々実施した内容は個人記録に記録し、それを基に見直し、評価を行っている。毎月カンファレンスし、職員の見意見をまとめている。また家族の見いも含め作成している。介護計画は説明し同意を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を個別に個人日誌などで記録し、スタッフ一人ひとりの入居者への気づきなどを記入している。介護計画の見直しに活かす事で、介護計画書の見直しに役にたっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	一人ひとりを支えるための事業所の多機能化については、当ホームは取り組みがまだしていないため、今後の課題となる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	一人ひとりの暮らしを支え、日々の楽しい生活を送れるよう支援しているが、地域資源を把握してはいるが、当グループホームとして、認知症の入居者へどのような支援が出来るのか？を検討課題としている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	3年前より、理想とする在宅医療として医療連携がやっと成立し、2人の掛かり付け医師の支援を受け、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組む様に努力している。納得が得られたかかりつけ医が2名ホームへ定期的に診療に訪訪されている為、適切な医療を受けられるように支援している。健康状態や急変時など24時間かかりつけ医師に報告し、協力病院に依頼など、適切な医療を受けられるように、自慢出来るホームではなが、この医療医師との関係は万全な体制で入居者への支援を行なっている。	ホーム協力医との連携が取られており、内科及び各専門科の往診が2週間に1度行われている。かかりつけ医へは職員が受診介助を行っている。受診内容は家族へ報告されている。緊急時も協力医の指導のもと、適切に対応出来る体制が整っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療加算の手続きはしていない。かかりつけの医師がその代わりをされている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	2人のかかりつけ医が2名ホームへ、常に定期的に診療に訪訪されている為、緊急の際には適切な医療を受けられるように支援される様に、病院関係との連絡がスムーズに行われている。また協力病院や長崎の医療設備の整った病院への入院で適切な医療を受けられるよう、2名のかかりつけの医師と病院との医師連携関係で、万全な体制で入居者への支援を行なっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行う事を、行う様にしている。看取りに関して契約書に明記し、家族に同意書もいただき、職員にもホームの方針を説明している。また身寄りが無い入居者に関しては、事業所として江口孝則総括施設長の考え方として「人としての最期を出来る限り誠意を持って行うことを当ホームでの基本」としている。無縁の方が年間に数名、死去されているが、考え方通りにすべての事、葬儀及び納骨までの期間の安置を江口孝則総括施設長自宅に設置している。12年間の歴史でもホーム入居者がグループホームとは最期までの介護が当然であるべきであるとしている。	ホームの重度化、看取りに関する指針が作成されており入居時に説明している。段階を踏んで家族や医師との話し合いの場を設け、改めて同意を得ている。看取りの事例があり、ホーム協力医との連携のもとアドバイスを受け職員は対応している。看取りの勉強会を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応法を定期的に訓練し、初期対応がスムーズに行えるよう常に訓練しているが、それでも不足であると思われる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	当ホームは、基準外の延床面積の為、スプリンクラーの設置がされて無く、坂の上の紫陽花は木造100年経過している建物であり、また隣接するグループホーム桜坂は木造30年であり火災においては神経質になっているため、2ヶ月に一度は昼夜の火災設備を利用した火災避難訓練を行なっている。冬期は入居者が室外への移動は無理な事もあり、従業員のみで訓練を実行している。入居者の命を守る為には必要な事であり、入居者へも訓練の大事さを、説明をして、協力をいただいている。施設長以下2名の甲種防火管理者講習を受け、地域の火災・避難訓練や地域の災害訓練に参加し日頃より実技を行っている。	年3回、避難訓練を行っている。また自主避難訓練も随時行われている。実際に夜間の訓練や、通報装置の作動訓練、利用者参加誘導訓練など行われている。但し消防署立ち会いが今年度なく、災害対策が検討中であった。	ホームの立地、構造、及び高齢者施設として安全意識の向上を踏まえ、消防署員立ち会いの訓練を実施されることを期待する。また、災害対策についても具体的な対策をとることを期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	理念に基づき、スタッフへ新人研修で一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけに配慮した言葉かけを行う事を江口孝則総括施設長自ら教育している。	利用者の尊厳を大切にした会話内容を職員間で検討し、周知徹底している。トイレ誘導時など羞恥心に配慮した言葉かけを行っている。個人情報に関わる資料は事務所で保管し、職員も守秘義務を周知徹底している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来るだけ、利用者の希望や思いを把握して一人ひとりのペースを大切にしているし、自己決定できるように働きかけている。が、長年ホームに入居している人が多く、自由な為、結構自己主張が多すぎる。事もある。が「自由に言える」のについては、それもありがたい事であるかも知れないと思っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員側の決まりや都合を優先せず、利用者の希望に出来る限りそって支援している。が、身体を動かない事があるため、毎日時間を決めてスタッフと触れ合い活動で変化のある日常の暮らしとしている		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者一人ひとりの個性に合わせ、その人らしくおしゃれが出来るよう取り組んでいる。散髪や理美容院にも希望者は行ける様にしている。衣服も化粧も個人の意志を尊重して自由にしてもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事が楽しみなものになるよう好みなどを取り入れ、栄養バランスにも気を使っている。が入居者の希望より、スタッフの食べたい希望を取り入れる為、スタッフがタンスの様になりつつある。一週間に2日は利用者と職員と一緒に食事作りをしている。	献立は利用者の嗜好や今食べたいものを取り入れ管理者が作成している。地元の旬の食材を使った食事作りを行っており、利用者との食事作りの日もある。誕生会や行事食など食事を楽しむ工夫をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べる量や栄養バランス、水分量。一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をし、個人に応じた食事量と1日の水分量などを日々の記録に明記している。一年中、生野菜だけは摂取が基本としている。料理は技量もあるが味においては努力の要素がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	基本にご誤の恐れもあるために、夜食後に口腔ケアは行う。また本人の力に応じた口腔内の清潔保持に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	定期的時間的にでなく、一人ひとりの排泄パターンを把握し、支援する事により、一人一人の失禁を出来る限り少なくなるよう支援している。	利用者の行動を時系列で記録し、排泄状況を把握している。時間や利用者の様子を見てトイレ誘導を行っている。日中はトイレ座位排泄支援を行っており、オムツからパッドへの軽減や失禁が無くなる等支援による結果が出ており、排泄の自立に向けた支援が行われている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	定期的にホーム内でのレクリエーションで、無理のない体操などの運動を行い、便秘予防に努めている。毎日便の状態を詳しく（色、堅い柔らかい？回数）排尿も色、回数の確認をしている。便秘の理由も原因等をスタッフのミーティング出報告などをして、一人一人の様子を把握することに、指示をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は月水金の週3回としているが、状況に応じて入浴出来ない者へは「足湯」を行っているが、足湯の設置をする事になってから数年たつが、足湯が入居者の楽しみになっている為、今日は毎日入居者は足湯をしている。入浴は一人ひとりの希望に沿った湯温度に設定している。	入浴日は週3回行われている。入浴日以外も状況に応じて行われている。足浴を毎日行っている。同性介助や入浴順番、湯温など個人の希望に添っている。入浴剤や家族の介助で入浴を楽しむ工夫を行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休憩したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自由な生活が出来る事が当ホームの特徴であるため、休憩したり安心して休まれるよう一人ひとりにあった生活環境を最善の提供している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	毎食後内服薬の確認をし、副作用などの変化に注意し用法などの理解をしている。ミーティングで説明等をしている。また間違った服薬がスタッフに無い様に、入居者の薬を一人一人分かりやすくしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の会話の中から趣味や生活歴を、なにげなく聞き出し、その過去を思いだしたりした、生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、の会話等で、楽しみごとにつながるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩などを行い季節の行事を企画し、花見などを行事の中に取り入れ外出の機会を多くしている。入居者も高齢になり夏に外出支援の為屋外に出掛けたが、熱中症の症状が出た為、控えた事もある。町内の盆踊りに入居者と共に出掛ける等は行なっている。入居者では、本人の希望でホームの犬を連れての近隣の散歩などもしている事を、自立する意味で、支援している。家族が外出する要請にも、すべて支援している。	天候や体調に合わせ、ホーム周辺を散歩している。車椅子利用者も同様に行われている。外出拒否があったら、ホーム花壇を作り外に出る工夫を行っている。温泉旅行や花見など全員で出かけ楽しみを支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	以前は一人ひとりに応じた金銭管理をしていたがお金の使用時の支援をしている事は、現在は行なっていない。が、入居者が「自由に自己の金銭を使う事が、生きがいである」という、希望がある方については「家族の理解が無くても、自由に使わせている」。それは江口孝則総括施設長の方針であり江口孝則総括施設長も、現在もこれから以降も所有金の使いは、同じ事をする思いであるために、本人の希望限り「自分の持ち金」をすべて使う事を支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者によっては、電話など自由に利用している。手紙については受け取りや投函が自由であり、投函困難の方はスタッフのほうで投函している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホームは市内で近隣では旧街道で龍馬が江戸に行く際に休憩し立ち寄った等、有数な別荘地と呼ばれる場所にあり、リビングの窓からは、四季折々の様子が観られる。例えば前方の山が山々の桜や紅葉が見られ季節感め込み絵の様になる。共通の空間については、ホームは旧住宅の為、入居者が入居以前に住んでおられた状態の継続であるとの意識で、暮らしが出来る様に、している。出来るだけ「家庭の延長」と云う位置付けの工夫が理想と考えている。また共有空間では犬・猫を飼い、利用者の癒しに繋がっている。	ホームは昔ながらの家を活用している。台所と居間は繋がっているため調理の音が聞こえ、テレビやソファが置かれ家庭的な雰囲気となっている。入居者はソファでくつろぎテレビを見て過ごしている。ソファの奥にダイニングテーブルがあり、季節の花が活けてある。壁には似顔絵などが飾られている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	民家を改築して家庭的な雰囲気の中で生活していただけるよう支援している。気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。入居者同士のトラブルも無い。一人になりたい時は自由に居室へ戻ることへの理解をしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人や家族と相談しながら、使い慣れた家具などを持ち込んでもらい、居心地よく過ごしてもらえるよう工夫している。何が駄目は「火の始末」だけで、その他はすべて使い慣れた物の持ち込みは了解している。	使い慣れた家具等がそれぞれに持ち込まれており、居心地の良いように工夫している。昔ながら家であり居室は畳等で、利用者が親しんだ環境になっている。トイレも各部屋の並びに1箇所ずつあるように作られている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全性を考えながら、出来る限り、入居者に取っては「分かりやすい事をも目的とした表示」を付けたりして、一人ひとりに合った生活環境を整えている。		